

# 『蜺縮涼鼓集』における四つ仮名以外の仮名遣い

久保田 篤

『しちすつ仮名文字使蜺縮涼鼓集』（元禄八年刊）が日本語史研究の

資料として極めて重要なものであることは、今更言うまでもない。特に凡例の部分にも著者の学識の高さが窺われ、主に音韻史の研究に大いに利用されてきた。この書が示す仮名遣いの中心は当然のことながら四つ仮名の仮名遣いである。従って四つ仮名以外の仮名遣いに関しては、解説等において触れられることは少なく、言及する場合も「定家仮名遣いによつてゐる」という非常に簡単な記述がなされるに過ぎない<sup>①</sup>。本書の性格からしてそれで十分とは言えるが、これまで当時の仮名遣いの実態をある程度見てきた立場からすると、四つ仮名以外の仮名遣いも詳しく知りたいと考へる。

四つ仮名の書き分けを示すことが目的の書であるから、それ以外の仮名遣いはあまり問題にしていないという可能性もある。しかし、例えば「あいぢやく 愛着」の注記に「あひト書ハ誤也／音アイ」（下一三才）という記述がある等を見れば、四つ仮名以外の部分にも注意の払われていることが分かる。序文の冒頭に「抑此書を編纂する事は

吾人言違ふる詞書誤れる仮名文字あるを正さんため也」（上一才）と述べるが、「書誤れる仮名」を「正さんため」ということは四つ仮名以外の部分にも及んでいると見られる。

凡例（「しちすつ仮名文字使凡例」）の最初には、

此書を輯むる事本より児女の輩のためなれば其詞の頭字を取て以呂波の序に随がひて是を集む又あおの仮名をも三音通呼の義に任せていをえの内に併入れ其中にて主麩の抄等に從がひて各仮名文字を書分ぬ然ればいろはにもとづきて尋ぬべし（上一二才）とあつて、語頭「ぬ」「お」「ゑ」の語は「い」「を」「え」の部に収録し、「い」か「あ」かなどの二つの仮名の書き分けは、「主麩の抄等」に從つたことが記されている。この「主麩の抄」は、同じく凡例にある「いゐひをおほえゑへわはうむふの十四字……定家卿の時分に至りて已に彼十四音を呼乱したる故に親行是を勸弁して仮名文字遣を定められき」（上五ウ）という記述等から、『仮名文字遣』である<sup>②</sup>と考へられる。（なお、仮名遣いに関することとして、本文「第十四か」部の項「かんなんもじづかひ」の漢字表記「仮名文字遣」の下には、「或仮名仕トアリ使ノ字可レ然欵親行ノ抄／始也今ソレヲ二人丸秘抄ト号

スルハ誤ナルヘシ」という注目すべき記述も見られる。) 仮名遣いを定める根拠としてまず挙げられる書が『仮名文字遣』であるということから、解説類の「定家仮名遣いによっている」といった記述は間違っていないことは窺える。

ただ、例えば「ひはづ 炬 弱」のところにある「主爨抄ニわノ部ニ入タルハ誤也ハノ仮名也」(下二五才)という記述<sup>①</sup>などから、全面的に『仮名文字遣』に従っているわけでもないことが分かる。そこで今回、『仮名文字遣』との比較を行いつつ、『蜷縮涼鼓集』の四つ仮名以外の仮名遣いの特徴を探ることにしたい。(仮名遣書の記述を記す際、漢字表記等の漢字は多くは新字体や通行の字体に直して示す。また、小書きの注記等は「」に入れて小書きにせず示す。2行割りの小書きは、既に右に引用した部分でも記したように、改行箇所を／で示す。漢字表記やこの小書きの注記は省略する場合も少なくない。)

## 二

定家仮名遣いの特徴としてまず挙げられるのは言うまでもなく「お」「を」の書き分けであるから、やはりまずこの点を検討しておく。「第十二を并お」(上二二ウ〜二三ウ)の部に掲出される語のうち、「お」で書かれているのは、「おぼろづき 朧月」「おほぢ 祖 祖父」「おうじん 応神」「おほなむぢ 大汝(神名又スミテモヨム/大己貴同)」「おじろのみま 駿馬(尾白)」「おもづら 讎(馬具/一頭絡一頭)」「おほづな 綱(大/一紀)」「おんじやく 温石(薬名)」

「おがくづ 鋸屑」「おんじき 飲食ノミモノ/クヒモノ」「おんじゆ 飲酒(一戒)」「おんじやう 音声」「おうずる 応(おうじて共)」「おもかぢ 面梶 面楫」「おもんずる 重(おもみする也/おもんじて共)」「おなじ 同(おなじう共)」「おほじか 麋(似鹿而大也)」である。

また、他の部に掲出される語にも、「いらしのおほぢから 貸税」(上一四ウ)、「ぜうのおもて 尉面」(下二六才)、「なまづお 鱈尾」(上二二才)、「ひおほぢ 曾祖父」(下二四才)、「ひ、おほぢ 高曾祖父」(同)などの語頭相当の「お」がある。

これら「お」の語について『仮名文字遣』慶長板本を見ると、以下のようになっている。「おぼろづき」は、「おほろ月夜 朧月夜」(ほ部)がある。「おほぢ」は、「お」部にも「ほ」部にも「おほち 祖父」がある。「ひおほぢ」「ひ、おほぢ」は掲出語としてはないが、この「おほぢ」と同じと見てよいか。「おもづら (讎)」は「おもづら 讎 結頭」が、「おんじやく (温石)」は「おんじやく 温石」が、「おんじやう (音声)」は「おんじやう 音声」が、「おなじ」は「おなじ」と「同事」が、「おほじか (麋)」は「おほしか 麋 大鹿」が、全て「お」部にある。「おじろのみま (尾白)」「なまづお (鱈尾)」は、これらと同じ掲出語はないが、「お」部に「おのへ 尾上」や「ひおのやま 日尾山」「かめのお山 亀尾」「ひとお 一尾」などが見られ、また特に「お」部の表題は「二 お 尾(略)」となっていることから、「尾」は「お」という意識があったと考えられる。(「おほなむぢ」

「おほづな」も無いが、漢字表記「大」の語は、「お」部の「おほうみ  
溟渤 大海」「おほね 菑菜 蕨 大根」「おほとねりれう 大舍人寮」  
など「おほ」である。「ぜうのおもて(尉面)」の「おもて」について  
は、「水のおも 水面(お部)を関連語としてよいか。」「おもんずる  
(重)」は「お」部に「おもる 重」、「を」部の「をもし(おもみの  
時ハお也) 重」という記述などがある。「おうじん(応神)」「おうず  
る(応)」や「おんじき(飲食)」「おんじゆ(飲酒)」については、こ  
れらの語の記載はなく、「応」字やオンの「飲」字の語も見当たらない  
ようである。「おがくづ(鋸屑)」「おもかじ(面梶)」「いらしのお  
ほぢから(貸税)」もない。以上、『蜺縮涼鼓集』において「お」で書  
かれる語について、記載がなく不明のものもあるが、『仮名文字遣』  
板本にも掲出されている語は全て同じ「お」であり、両者は一致する  
と言つてよい。

一方、「を」で書かれる語は、「を并お」部に「をにつか 鬼塚」「を  
んぢ 恩地(一―氏同)」「をんじ 遠志(薬名)」「をんやうじ 陰陽  
師」「をぢ 舅 伯父(父/兄) 叔父(父/弟)」「をこじ 臙」「を  
しまづき 几(ヨリカ、リ也) 机」をこしずみ 興炭」「をんじゆ  
つ 恩恤(メグミ也)」「をなじ 項」「をのづから 自(ヲノレヅカ  
ラ也/自己也)」「をのがじ、各自恣(我心々也)」「をとづれ(をと  
づる、共) 音信 消息」をづる 怖 畏」をぢて 畏<sup>同上</sup>」がある。  
他の部にも、語頭相当のものまたは字音の頭のものとして、「かづ  
らのを 葛緒(上二五オ)、「しづのをだまき 賤小手巻(下二〇

ウ)、「しづはたをび 賤機帯(同)、「たちからを 手力雄(上二七  
ウ)、「つゝらをり 九折(一―坂)」「(上三〇オ)、「ぎをんしやうじや  
祇園精舎(下一四ウ)が見られる。(これ以外に語中「を」の語が幾  
つかあるが、それらについては後程第八節の語中語尾の「ほ・を」の  
ところで見る。)

これらの「を」の語についても『仮名文字遣』板本を見る。「をに  
づか」の「鬼」については、「を」部に「をに(おにとも) 鬼」「お」  
部に「おに(をにとも) 鬼」があつて、「お」「を」両方を示してい  
るが、下に成分等の付いた「をにのしこくさ 鬼志許草(万葉二見)」「  
(を部)・「をにやらひ 儼追 儼事也(を部)はこのように「を」で  
ある。「をぢ」は「をち 伯父(略)」「が、「をこじ」は「をこし  
臙魚」が、「をこしずみ」は「をこしすみ 興炭」が、「をのづから」  
は「をのづから 自」が、「をとづれ」は「をとづれ 音信 音」が、  
全て「を」部にある。「をなじ(項)」は、『蜺縮涼鼓集』に「をなじ  
項(主爨抄二出 注ニ/うなじ共ト有)」「(上二三オ)という注記があ  
るとおり、「をなし(うなし/共) 項(を部)がある。「をのがじし」  
は「をのか 己之(を部)があるので同じものとしてよいであろう。  
「しづのをだまき」は「しづのをたまき 賤小手巻(し部)が、「つゝ  
らをり」は「つゝらをり 九折 盤折(文選)」「(つ部)がある。「を  
んぢ(恩地)」「をんじ(遠志)」「をしまづき」「をづる・をぢて(怖・  
畏)」「ぎをんしやうじや(祇園精舎)については記載がない(「をん  
ぢ」の「恩」の字の語は「をんしゆつ 恩恤(を部)があるが)。

このように「を」も「お」と同様に基本的に『仮名文字遣』と一致していると言えるが、一つだけ疑問の語として「をんやうじ 陰陽師」(上二三才)がある。この語の掲出が『仮名文字遣』にあるわけではないが、同じ「陰」字の「おんやうれう 陰陽寮」が「お」部にある。寛文六年に刊行された『類字仮名遣』は、『仮名文字遣』に従うところの多い仮名遣書と見られるのであるが、「お」の部に、

おんやうれう 陰陽寮 (二人丸秘)

おんみやうし 陰陽師 (源氏)

のように二語を並べて掲げる。「陰陽寮」のほうは注記に「二人丸秘」とあることから分かるしており『仮名文字遣』を典拠とし、「陰陽師」は『源氏物語』としている。これらから定家仮名遣いでは「お」となることが予想できそうだが、『蜷縮涼鼓集』では「を」で示している。この項目には何の注記も無いので、根拠は不明とせざるを得ない。

このように、定家仮名遣いとは異なる可能性のある1語はあるが、『仮名文字遣』慶長板本に同一語が記載されている場合については、「お」「を」の書き分けが全く一致している。念のため、いわゆる歴史的仮名遣いとの一一致・不一致について見ておくと、同一語が両本にあるもののうち、「お」の「おなじ(こと)」「(同)・「おほじか」(麩)・「おほぢ」(祖父)・「おぼろづき(夜)」「(臈)・「おもづら」(糶)・「おんじやう」(音声)・「おんじやく」(温石)、及び「を」の「をぢ」(伯父)・叔父)・「しづのをだまき」・「つゞらをり」(九折)などは歴史的仮名遣いと同じであり、一方、「お」の「おゝ」「ゝお」(尾)、「を」の「を

こじ」(臈)・「をこしずみ」(興炭)・「をとづれ」(音信)・「をなじ」(項)・「をのが(じし)」「(己)・「をのつから」(自)などは歴史的仮名遣いとは異なる表記ということになる。

以上見たように、語頭の「お・を」に関しては、凡例の「主爨の抄等に従がひて」という記述のとおりで、ほぼ全面的に定家仮名遣いによっていると言つてよい。

### 三

『蜷縮涼鼓集』には、字音語も非常に多く掲げられている。字音の仮名遣いについては、特に2拍となる字の、2拍めの仮名遣いは単純で規則的であり、当時もその点を十分に意識していたことは既に多く指摘されておりとおりである。そこで続いて字音語の仮名遣いを見ておくことにしたい。(ここでは、小書き注記は殆どは省いて簡略に示す。漢字表記も複数ある場合は適宜省略する。)

語頭の「い・ゐ」について、まず「第一い并ゐ」の部(上二三才)一五才)に収録された語を挙げると、「い」は「いちでう 一條」「いじゆつ 医術」「いんじよう 引證」「いんぜふ 引接」「いちぢやう 一定」「いちでふ 一畳」「いちでふ 一帖」「いちじよう 一乗」「いちぢゆん 一順」「いちじき 一食」「いちじつ 一実」「いちじ 一字不説」「いちこつでう 壹越調」「いじやう 以上」「いふじやう 揖讓」「ゐ」は「ゐんじや 隠者」「ゐんじゆ 院主」「ゐんじ 院司」「ゐんじゆ(いん共) 員数」「ゐんぢ 印地」「ゐんじ 韻字」である。

また他の部の語として、「い」の「にょいはうじゆ 如意宝珠」(上一七才)、「ほふいはじめ 布衣始」(上一八才)、「むじんい 無尽意」(下一ウ)、「じちいき 日域」(下一八ウ)、「ずいい 随意」(下一一ウ)、「ゐ」の「ろくゐずくせ 六位宿世」(上一五才)、「かんじんゐん 感神院」(上二四ウ)、「うぢゐ 雲林院」(下一二才)、「さんぢうゐん 三重韻」(下一四ウ)、「じやうゐ 讓位」(下一二才)がある。

これを見ると、「ゐ」の字は、「院」(4例)、「韻」(2例)、「位」(2例)、「隠」、「印」であり、「員」は「い」も認めるということになっている。『仮名文字遣』慶長板本の「ゐ」部には、「ゐんし 院司」があり、「ゐんくはゐ 員外」もあるがこの語は「い」部に「いんくはい 員外」もある。『蜷縮涼鼓集』で「ゐんじゆ(員数)」に「いん共」と付されている点には、『仮名文字遣』との共通性が見られる。また「い」の字は数が多いので一つ一つの検討を省くが、『仮名文字遣』慶長板本にある字は同じ「い」である。

語頭の「え・ゑ」について見ると、「第三十四え并ゑ」(下一〇才・ウ)には、「え」の「えんのぎやうじや 役行者」「えんじや 縁者」「えんじ 臙脂」「えんじよ 艶書」「えんじやく 円寂」「ゑ」の「ゑいじつ 永日」「ゑんじよ 遠所」「ゑじま 絵島」「ゑんじ 遠寺」「ゑんじゆ 槐」「ゑじ 衛士」「ゑいじゆつ 栄術」「ゑづ 絵図」「ゑずる 怨」「ゑいずる 詠」「ゑいずる 映」、両方認める「えじき(ゑ共) 衣食」がある。他の部には、「え」の「じうえん 従縁」(下一九ウ)・「じやうえ 浄衣」(下一〇ウ)と、「ゑ」の「かいぢやうゑ

戒定恵」(上一二六才)・「だいじやうゑ 大嘗会」(上一二八才)・「しんじやうゑ 新嘗会」(下一三才)・「じやうゑ 淨穢」(下一三ウ)がある。

これらについて、『仮名文字遣』慶長板本を見ると、同じ掲出語として、「え」の「えんし 臙脂」(え部)、「ゑ」の「ゑいす 詠」(ゑ部)「ゑいす 詠」(い部)・「ゑしのたく火 衛士焼火」「大しやうゑ 大嘗会」「しんじやうゑ 新嘗会」「ゑんす 槐」「日にゑいして 映日」「ものゑんし 怨」「ゑしま 江島 絵島」(以上ゑ部)があり、漢字表記に共通部分がある語として、「え」の「えんなる心ちして 艶」「えんじう 円豆」「くんえかう 薰衣香」「えもむ 衣文」(以上え部)・「えいてつ 映徹」(い部)、「ゑ」の「ゑ 絵 画」「ゑふく 衣服」「ゑいくはの物語 栄花物語」「ちゑ 知恵」「ゑきやうほうし 恵慶法師」「しゆんゑほうし 俊恵法師」「ゑ 穢」(以上ゑ部)・「ゑいよう 栄耀」(ゑ部・い部) などがある。

一致するのが「えんじ(臙脂)」「ゑじま(絵島)」「ゑんじゆ(槐)」「ゑじ(衛士)」「ゑんずる(怨)」「ゑいずる(詠)」「ゑいずる(映)」「大じやうゑ(大嘗会)」「しんじやうゑ(新嘗会)」と、「えんじよ(艶書)」「ゑいじ(絵図)」「の「絵」」「かいぢやうゑ(戒定恵)」「の「恵」」「じやうゑ(淨穢)」「の「穢」である。「えじき(ゑ共) 衣食」の「衣」がこのように「ゑ共」となっている点は、慶長板本の「衣」字が「くんえかう」「えもむ」「ゑふく」と両様である点と共通している。「じやうえ(浄衣)」のほうは「え」のみであるが、慶長板本の「衣」字も「え」

2語「ゑ」1語である。「えんのぎやうじや(役行者)」「えんじや(縁者)」「じうえん(徒縁)」「ゑいじつ(永日)」「ゑんじよ(遠所)」「ゑんじ(遠寺)」については不明とせざるを得ないが、以上のようにこの字音頭の「え・ゑ」についても両書は一致していると言つてよい。

語頭の「お・を」については既に前節で見たとおりであるので、続いて字音の2拍めの仮名遣いを検討する。

「ーイ」は全て「い」となっている。用例は非常に多いので全て示すことは避けるが、例をやや多めに五十音順にして挙げておく。「あいちやく 愛着」「かいじん 海神」「きざい 奇瑞」「ぎやうずい 行水」「けいじやう 啓上」「けいじん 雞人」「こつずい 骨髓」「さいじやう 最上」「さいじん 才人」「さいぢよ 妻女」「じざい 自在」「じせい 辞世」「じゆんれい 巡礼」「すいじん 水神」「ずいき 随喜」「ずいさう 瑞相」「せいじ 青磁」「せいじう 西戎」「せいじよ 清書」「せいじん 聖人」「だいい 大事」「たいじやう 怠状」「たいぢ 退治」「たいぢん 対陣」「ぢうだい 重代」「ぢかい 持戒」「ぢんあい 塵埃」「づんばい 磔落」「ていじんこう 貞信公」「ねいじん 倭人」「ぶんずい 文粹」「へいじ 平氏」「へいじ 瓶子」「へいぢう 屏重門」「ぼだいいじゆ 菩提樹」「まいじ 毎時」「めいじゆ 名儒」「めいずる 命」「らいじん 雷神」「るいじつ 累日」「るいじゆ 類聚」「れいじん 怜人」「れいちやう 霊場」「わいじん 煨燼」「ゑいじつ 永日」「ゑいじゆつ 栄術」などである。これら90語以上

が全て「ーい」になっており、「ひ」「ゐ」は1例もない。当時の仮名遣書でもここが「い」である点を述べる書が多いが、冒頭にその旨を記しつつ「ひ」「ゐ」の見られる『初心仮名遣』などもあるので、『蜷縮涼鼓集』において全く例外のない点は注目してよいことである。

『仮名文字遣』慶長板本では、もちろん「てい 泥」「れいしゆ 醜酒」「にしのたい 西対」「たい 題」「たいこ 大鼓」「らいたう 礼堂」など「い」が多いが、「あひして 愛」(二六ウ)、「くちなひ 宮内」(同)があつて、「ひ」(傍書として「ゐ」も)を示している語もある。特に「愛」に関しては、『蜷縮涼鼓集』の「あいちやく 愛着」に「あひト書ハ誤也」と記されていることを既に最初に示した。「主爨の抄」に従いながらも、誤りと考えた部分は採用しない姿勢を有していることが分かる。

一方「ーウ」には「う」と「ふ」の両方が見られるが、「ふ」の語のほうが少ないので、全て挙げてみると、  
 いんぜふ<sup>ッ</sup> 引接(「ー如来/接ハ入声セフ」)(上一四オ)  
 いちでふ<sup>ッ</sup> 一畳(「タ、ミ也/畳入声テフ」)(同)  
 いちでふ<sup>ッ</sup> 一帖(「紙ー/草紙ー」)(同)  
 (いちじき 一食(「ー汁ー時」)(同))  
 いふじやう<sup>ッ</sup> 揖讓(「揖入声(イフ/イツ」)(上一五オ)  
 ろくでふ 六帖(「本ノ名/源氏六十帖同」)(同)  
 はんでふ 半畳(「小畳也」)(上一六オ)  
 にふぢやう 入定(「にうノ仮名ハ/誤也下同」)(上一七オ)  
 にふじ 入寺(「入堂」)(同。右の下)

ほふいはじめ 布衣始 (上一七ウ)

へんでふ 返牒 (牒状一 / 牒札也) (上一八オ)

ぢやうごふ 定業 (仏法 / 一非業) (上一二一オ)

ちようでふ 重畳 (カサヌル也 / てうでふハ誤也) (同)

るいじふ 類集 (同前) (前は「類聚」) (上一二二ウ)

なんじふ 難渋 (渋ハ入声ジフ) (上一二三ウ)

なふじゆ 納受 (納ハ入声ナフ) (同)

けふじ 脇士 (菩薩) 一。入声 / ケフノ音也古書ニケウトモ有

(下六ウ)

ぶんじふ 文集 (書 / 白氏一 / 菅家一) (下八オ)

でふろく 畳六 (双六目 / 或種六) (下一一オ)

でふに 畳二 (双六ノ目 / 或種二) (同)

てふじやう 牒状 (返一) (同)

てふじあはする 牒合 (下一一ウ)

ざふじ 雑事 (入声ザフ) (下一四オ)

きんじふ 近習 (きんじゆ共 / 入声シフ) (下一五オ)

きふじ 給事 (給入声音キフ / 一 / 中) (同)

きふじ 給仕 (配膳) (同)

きふじ 急事 (急ハ入声キフノ音 / キウノ仮名ハ誤也) (同)

じふぜんじ 十禅寺ノ宮 (江州) (下一九オ)

じふらうひめ 十郎姫 (或云十郎坎ノ姫ハ音 [ヂヤウ / ニヤウ])

(下一九ウ)

じふらう 十郎 (十八入声しふノ仮名 / しうト書ハ誤也) (同)

じやうらふ 上臈 (略) (下二〇オ)

しふから 四十柄 (小鳥) 四十雀 (同)

しふじりつ 十二律 (下二一オ)

じふもつ 什物 (一器) (同)

しやうじつばふ 商実法 (算法ニ / 有之) (下二二オ)

しふぢやく 執着 (執入声シフ) (下二三オ)

じふ 十 (一 / 百一 / 郎一 / 王一 / 羅一 / 善一 / 悪一 (人名ニ / 用同)) 拾 (物

ノ数ニ用 / 十と同義) (同)

となる。これを見ると、「一ふ」の字には、殆どの場合、「ふ」に「ウ」の振り仮名を付し、「入声」である旨を記している。「入声」注記のある字は、「接」、「畳」、「帖」、「揖」、「洪」、「納」、「脇」、「雑」、「習」、「給」、「急」、「十」、「執」である。同じ字が、既に前に掲出されている、あるいは同じ頁にあって、「入声」注記が加えられている等の場合は、注記を繰り返すことはないようで、そのため注記がないと見られるものを除くと、注記がない字は、「入」、「牒」3例、「業」、「集」2例、「臈」、「什」、「法」と、振り仮名「一フ」の「汁」である。なお、下巻末尾にある「追加 十七條」には、「一ふ」の字として、

ぜふ 聶囁

でふ 帖置

じふ 十汁什拾入洗

が挙げられている (下二九ウ)。次に字音「一う」であるが、この字

を含む語は「ーい」以上に多く極めて多数であるので、これも全て挙げることは避けるが、やはり例をやや多めに五十音順に示しておく。  
 「あんぢう 案中」「いちじよう 一乗」「いちぢやう 一定」「うじやう 有情」「うんじやう 運上」「おうずる 応」「おんじやう 音声」「かうじ 好事」「かうじやう 高声」「きちじやう 吉祥」「きやうぢう 京中」「きやうぢやう 軽重」「くうち 空地」「くでう 九條」「くはうじん 荒神」「けうずる 興」「げんぢやう 嚴重」「こうじやう 口上」「こんじやう 懇情」「さうじよ 草書」「さうち 掃除」「しうじつ 終日」「じきだう 食堂」「じやうぎやうだう 常行堂」「じやうみやうこじ 常名居士」「しんじやうゑ 新嘗会」「すじやう 種姓」「せうじよう 小乗」「ぜうまう 焼亡」「そうじやう 奏上」「そうじやう 僧止」「たうち 湯治」「だうちやう 道場」「ぢうきよ 住居」「ぢぢごう 地藏」「つうじ 通事」「づなう 頭脳」「でうど 調度」「とうじ 東寺」「とうじやう 登城」「なんでう 南條」「にんじやう 人情」「ねんぢうぎやうじ 年中行事」「はうじやう 放生」「はうぢやう 方丈」「まうじ 孟子」「まんぢやう 饅頭」「みやうじう 明州」「みやうじやう 明星」「むじやう 無常」「めんじやう 免状」「もんじやう 文章」「やうじやう 養生」「ゆとうもじ 湯桶文字」「ようじん 用心」「らうじう 郎従」「らうせうふぢやう 老少不定」「らうぢう 老中」「りやうじやう 領状」「りうぐうじやう 龍宮城」「れうぢ 療治」「ろうじやう 籠城」「わうじ 皇子 王子」「わうじやう 往生」（またンが変化した「かうじ 柑子〔和名ニカンジ〕等も）

などで、400例以上の「ーう」が示されている。

これらも各の比較・検討は省略するが、『仮名文字遣』慶長板本には、「ふ」部に「きふに 急」や「てふ 蝶」などがある一方で、「う」部に「てう 帖 畳」や「てう 蝶 御蝶」などがあるというように、入声字であるから「ふ」であるとする『蜷縮涼鼓集』のような規則的な仮名遣いは全く行われていない。『初心仮名遣』も「う」と「ふ」の書き分けの根拠が全く分からず気まぐれに思われるほどである。『蜷縮涼鼓集』の字音の「う」「ふ」の書き分けは厳密であり、その統一性には、素性は不明ながら言語に対する洞察力に優れ韻学に深く通じていると推測される著者の面目躍如たるものがあると言えよう。

字音の仮名遣いの検討の最後として、合拗音の表記を簡単に見ておく。合拗音を含む語には、「くはうじん 荒神」「くはじ 火事」「くはじやう 過上」「くはちぎやうじ 月行事」「くはんじや 冠者」「くはじや共」「くはんじやう 疑状」「くはんじゆ 貫首」「くはんじゆ 卷数」「くはんじゆじ 勤修寺」「くはんじん 勤進」「くはんじく 卷軸」「くはんぢやう 灌頂」「じやうくはく 城郭」「たらうくはじや 太郎冠者」「ぢやうぐはん 貞観」「とうなんくはんぢよ 童男卯女」「ながれくはんぢやう 流灌頂」などがあり、全て「くは」「ぐは」の表記が示されている。この合拗音の「は」表記は、いわゆる正しい字音仮名遣いではないが、当時の一般的な仮名遣いであったと見られるものである。<sup>9)</sup>（なお、右のように、時に「は」の右に「ワ」の注記の付されているものがあるが、このワに関しては、付す付さないの基

準は明らかではない。

#### 四

以下、(語頭の「お・を」以外の)和語の仮名遣いについて見ていくことになるが、その最初に動詞の活用語尾(及び連用形が名詞化したもの)の仮名遣いを検討する。当時、活用語尾の表記には注意が払われていた。仮名遣い規則書の類においては、まずは活用を根拠に仮名を決定する点を示すのが一般的であり、仮名遣い辞典の類でも、「連用形の名詞化したものを、隣に並べて掲げたりして示したり、終止形と、とも」などとして同語の他の活用形を合わせて示したり、この『蜷縮涼鼓集』でも、他の活用形が合わせて示されることがある。

動詞の活用語尾、また連用形が名詞化したものと見られる語を挙げると、以下のような。

もとハ行四段動詞のものとして、

- いしづかひ 石使〔硯ノ異名〕(上一三ウ)
- はづくろひ 刷羽〔ハネヅクロヒ也〕(上一六ウ)
- とはづがたり 不問語(以下略)(上一九オ)
- ぢやうづかひ 定使(上一九ウ)
- ぬひどの、ぢん 縫殿陣(上一二二オ)
- わずらふ〔わづらひ共〕 煩 累<sup>同</sup>(上一二四オ)
- かよひぢ 通路(上一二四ウ)
- かんなもじづかひ 仮名文字遣(略)(上一二六ウ)

よめづかひ 媵 嬪<sup>同</sup>(上一二七オ)

た、ずまゐ 立住居〔立栖居<sup>同</sup>〕た、ずまひ共(上一二八ウ)

そはづたひ 俎伝(上一二九ウ)

つけずまひ 屬〔馬〕(上一三〇ウ)

なづさふ 昵近 親昵〔ナル、也〕(上一三二オ)

まじなふ 祝 咒<sup>同</sup> 厭<sup>同</sup>〔まじなひ共／まじなひて共〕(下一六ウ)

こづたふ 木伝(下一九ウ)

こ、ろづかひ 心遣(下一九ウ)

こはづくろひ 警〔声繕ノ之義〕一欸<sup>同</sup>〔セキノハラヒ〕(下一〇オ)

きづかひ 氣遣〔心遣也〕(下一五ウ)

めしづかひ 召使(下一七オ)

しまふ 進退 棲<sup>同</sup>遅(下一三三オ)

ひこづらふ 拏〔掣同ノヒク也〕(下一二四ウ)

すぢかひ〔斜向也／すぢかふ共〕筋違(以下略)(下一二七ウ)

があり、もとハ行下二段動詞は、

- かづふ〔かぞふ共／かぞへて共〕数 筭<sup>同</sup> 計<sup>同</sup>(上一二六オ)
- かざまへらる、被数〔かぞへらる、也〕(上一二六ウ)
- たづさふ 携〔たづさへて共〕(上一二八ウ)
- なづらふ 准 擬〔なづらへ共／なぞらふ共〕(上一三二ウ)
- まじはる 交接 雜<sup>同</sup>〔まじへ共／まじふる共〕(下一六オ)
- さ、へじやう 支状(下一四オ)

みやづかへ 宦 仕宦 出身 (日本紀) (下一七ウ)

があつて、以上のように殆ど全てハ行の仮名で示されている。「た、ずまゐ」1例のみが「ゐ」であるが、これは漢字表記が「住居」となっていることによると見られる。漢字表記「居」の他の語は、「ゐずくみ 居偃」「ゐずまひ 居栖」「うずゐ 蹲居」「くもゐち 雲居路」のように全て「ゐ」である。(それでも「た、ずまゐ」には「た、ずまひ共」という「ひ」も認める注記が加えられる。この「ひ」が本来の表記であるという認識があつたのかは分からないが、この語の上に「た、ずむ 佇」があることその他から「ゐ」に何らかの疑問を感じたか。)

ところで、次節以降に示す例を見ると分かるように、『蜺縮涼鼓集』では、語中語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」でワイウエオ音のものには、必ずハ行の仮名に「ワ」「イ」「エ」「ヲ」の振り仮名が付されている。しかし右の例を見ると、活用語尾(及び連用形名詞化のもと語尾部分)に限るとあまり付されていないことが分かる。付されている語は(「まじはる」のような語幹部分に見られるものは、活用語尾ではないので除くと)、「とはすがたり」「ぬひとの」「かよひぢ」「つけずまひ」「さ、へじやう」「みやづかへ」である。これらはみな連用形が名詞化したもの及びその複合語である。このことから、語中語尾のハ行の仮名にはワ・イ・ウ・エ・ヲの音を振り仮名で示すことを基本とするが、動詞活用語尾の場合は不要であると考えていたという推測ができようである。名詞化したものも、「づかひ」のような動詞の連用形によ

ることがすぐ分かるような語は同様に付さない扱いをするが、すぐに分らない、または動詞との関連がないと判断される語については付すということになっているのではないか。この音注記に關しても、かなりの注意が払われているようである。

もとワ行下二段動詞の例は、

よすへ 夜居(鷹) (上二七オ)

うへじに 餓死 殍(同) (下三オ)

があり、仮名「へ」であるが、これは他の仮名遣書にも主張があり、作品類にも見られる当時の一般的な表記である。『仮名文字遣』慶長板本は、「うへをく 栽 植」「うへたり 飢」「すへて 居」「むまをすへて 馬居」(漢字表記が複数あるものは適宜省略した)など「へ」のほうが多いものの、「すゑて 馬ヲスエ留也」もあり統一性に欠ける。ただ、『蜺縮涼鼓集』の例が少ないのでこれ以上の考察は省くことにする。

動詞活用語尾は以上の三種類しかないが、「た、ずまゐ」以外は全てハ行の仮名になっていて乱れないことも、これまで見てきた部分と同様の特徴である。

## 五

和語の「は・わ」について見る。ワは殆ど全て「は」で書かれている。まず「は」の語を示すと、

いはしみづ 石清水(八幡) (上一三オ)

いはつゝじ 羊躑躅〔もちつゝじ〕（上一三オ）  
 いたづがはし 勞 煩〔同上〕（上一四ウ）  
 にはたづみ 潦〔庭澇／タマリミヅ也〕（上一七オ）  
 ちりにまじはる 同塵〔和光一〕（上一二ウ）  
 かぢはら 梶原〔一氏同〕（上一四ウ）  
 かはづ 河津〔一氏同〕（上一四ウ）  
 かはづ 蛙〔水虫〕（上一五オ）  
 かうじかは 麴皮（上一五ウ）  
 かはぜうえう 川道遙（上一五ウ）  
 そはづたひ 岨伝（上一九ウ）  
 なにはづ 難波津〔摂州〕（上一三ウ）  
 うはづゝみ 表包〔上一同〕（下一二ウ）  
 くずは 樟葉〔河内国葛／或、楠葉共〕（下一三ウ）  
 まじはる 交接 雜〔まじへ共／まじふる共〕（下一六オ）  
 ふぢかは 藤川〔美濃／関ノ一〕（下一七ウ）  
 ふぢはら 藤原〔略〕（下一七ウ）  
 こはづくろひ 警〔以下略〕（下一〇オ）  
 あはぢ 淡路〔略〕（下一一ウ）  
 あはづ 粟津〔略〕（下一一ウ）  
 あづまわらは 東堅子〔女官〕（下一二オ）  
 きはづく 際付〔汚斑也／きはづき共〕（下一五ウ）  
 しづはら 静原〔山城又／一山同〕（下一六オ）

みづは 罔象〔水／神〕 魍魎〔和名ミツチ共〕（下一七ウ）  
 じやうごは 情強 一張 諍一〔下二二オ）  
 ひはづ 厄 弱〔主爨抄ニわノ部ニ入／タルハ誤也はノ仮名也〕  
 （下一五オ）  
 せきのふじかは 関藤川〔美濃〕（下一六オ）  
 （下一七オ）  
 となる。1例〔ちりにまじはる〕以外の全てにおいて、「は」に振り仮名「ワ」が付されている。

『仮名文字遣』には、同一語（あるいは関連する語）として、「いはしみつ 岩清水（い部）、「いはつゝし 羊躑躅（い部）、「かはせうよう 河道遙（は部）、（「こはし 強 剛 健（は部）、（「なには江 難波江（え部）、「にはたづみ 潦（は部）、「ひわつなる人 弱（わ部）、（「ふぢはらのことなほ 藤原言直（は部）、「ましはる 交 雜（は部）がある。「ひはづ」については、最初の節にも示し、また右にも記したとおり、「主爨抄ニわノ部ニ入タルハ誤也はノ仮名也」という記述があり、『仮名文字遣』の「ひわつ」とは異なっているが、「は」とする根拠は示されていない。これ以外の、記載のある語は、全て「は」で一致している。

「わ」の語は、  
 くつわづら 轡〔一ニ云クツハト誤坎／和名ニ久都和〕（下一四オ）  
 の1例のみで、この語は『仮名文字遣』には記載がない。『類字仮名遣』には「くつわづら 轡〔倭名〕とあって同じく「わ」であり、やは

り同じく和名抄を記す。

## 五

続いて「い・ひ・る」の仮名遣いについて検討する。

まず語頭の「い・る」であるが、「い」で示される和語を、小書き注記は仮名遣いに関わるもの以外を省略し、五十音順にして挙げる(前節に示した仮名「は」を含む語を再び示す場合は仮名表記のみを掲げる)と、「いかげち 沃懸地」「いかづち 雷」「いきづく

嘘 噎」「いけずき 生食 生喫」「いさづる 泣 憂泣」「いしづり 石摺」「いしずる 礎」「いしづかひ 石使」「いしづき 石築」「いしづき 石突」「いしはじき 旛」「いしはじき 彈碁」「いすゞ川 十鈴」「いそぢ 五十」「いたじき 板敷」「いたづがはし 勞 煩」「いたづき 勞 煩」「いたづき 平題 衡鎗 平一」「いたづら 徒空」「いつくしんずる 愛 慈」「いづくんぞ 何」「いづくこ 何所」「いづさいるさ 出左入左」「いづち 何地」「いづの国 伊豆」「いづのちわさ」「いづみ 泉」「いづみの国 和泉」「いづもの国 出雲」「いづら 何所等」「いづる 出」「いづれ 何 孰」「いとすぢ 線 綫」「いなづか 穢」「いなづま 稻妻」「いのちみじかし 夭」「いはしみづ」「いはつゝじ」「いへち 家路」「いへづと 家土産」「いへとうじ 主人女 家童子」「いぼじり 螳螂 蟪蛄」「いみじく 伊美敷」「いもじ」「いもじうとめ 姨」「いやめづらし 弥珠 長命」「いらしのおほちから 貸税」「いらづる 苛」「いれずみ 黥 刺」「いろづく

色付」などとなる。また、語頭相当のものとして、「はじいろ 表黄 裡薄萌黄」「わけいかづち 別雷」などがある。『仮名文字遣』には、「い」部に「いかつち 雷」「いし 石」「いしすゑ 柱礎」「ゑ」部にも「いすゝかは 五十鈴川」「いはしみつ」「いはつゝし」「いへ 家 宅 舎 齋」「いほしり 蟪蛄」「いもし 同上(上は「いもから)」「いろ 色彩」などがあり、「へ」部に「いへとうじ 主人女」がある。

一方、「る」の語は、「るづくみ 居偃」「るずまひ 居栖」「るづ、井筒」「るづな 飯繩(いづな共ノ一ノ法)」「網イ」「るのこづち 牛膝(ゑのこづち共ノ和名ニキノクツチ)」である。また、漢字表記した場合に漢字1字の頭に当たるものを語頭相当とすれば「うずる 蹲居」「かぢる 梶井」「くもるぢ 雲居路」などを加えることができる。『仮名文字遣』板本には、「る部に「るのこづち 牛膝」と「るる 居」「る 井」「かれるひ 餉(飯の事也又ノ旅食飯也)」がある。このように、語頭の「い・る」は、基本的に『仮名文字遣』と一致している。

では語中語尾の「い・ひ・る」はどうか。出現順に示すと、

はじにほひ [鑑二有] (上一六オ)

はいずみ 掃墨〔此いノ仮名ノキノイ也〕 (上一六ウ)

ぢい(祖父ヲ云又老翁ヲ云或云おほちノ上略坎おうばヲうばト

云同意) (上一〇オ)

かじる 香椎(宮) (上一四ウ)

かおもとあるじ 垣下主〔略〕 (上二五オ)

かひづくし 貝尽 (上二五ウ)

ついで共 築地 築塙〔和名／築土共〕 (上三〇オ)

ついで 序 叙〔ついで共ついで、共／云つゝあづる按ニキノイ

也〕 (上三一オ)

なまじぬ 愁 (上三二オ) 愁愁

うぬぢん 初陣 (下二ウ)

あひづ 会津〔奥州／一蠟燭同〕 (下二二オ)

あぢさい〔和名ニアツサキ〕 紫陽花〔あぢさひ共／あぢさへ共〕

(下二二オ)

あみぢり 藍摺 (下二二ウ)

あひづ 相図 (下二三オ)

さいたづま 若草〔万〕 (下二三ウ)

さいづえ 罇〔田器也〕 (下二四オ)

さいづち 搔槌〔椎同〕 柎揆〔和／名〕 (下二四オ)

ひいづる 秀〔ひいで、共〕 (下二四ウ)

すひかづら 忍冬藤 (下二七オ)

となる。

これらのうち、『仮名文字遣』慶長板本に記載があつて仮名が一致する語を、関連語を含め『仮名文字遣』の仮名遣いを示すと、「かしのみや 香椎宮」(ぬ部)、「かいまみ 闕窺 垣間見」(い部)、「かひ 貝」(ひ部)、「ついで 築地」(い部)、「あみ 藍」(ぬ部)、「さ

いつえ 罇田〔器也〕〔え部〕・さいつえ 罇〔田器也〕〔い部〕・さいつち 搔槌〔い部〕、「すひかつら 忍冬草」(ひ部)、「ついで 築地」(い部)となる。

また、『仮名文字遣』慶長板本に、『蜷縮涼鼓集』と同じ仮名遣いも示されるが、異なる仮名遣いも示されているものとして、次の語がある。

まず「なまじぬ 愁」であるが、『仮名文字遣』には、「ひ」部に、

なましひ〔なましぬ共／なましひ共〕 愁

があり、「い」部に、

なましい〔なましぬ共〕 愁

があり、「ぬ」部に、

なましぬに 愁〔なましひ共〕

とあつて、三つの仮名どれも示されている。これらのうち『蜷縮涼鼓集』では「ぬ」一つを選択したということになる。

「うぬぢん 初陣」については、『仮名文字遣』慶長板本にこの語はないが、関連する語として、「い」部に、

ういかふり 初冠〔叙爵也〕

があり、「ひ」部に、

うひこと〔うぬ／とも〕 初言

があり、「ぬ」部に、

うぬくし 皺 初敷

がある。このようにウイの部分三つの仮名で示されているが、『蜷

縮涼鼓集』ではやはり「ゐ」のみを選択している。

「ついで」序」は、小書き注記に見られる「ついで」が『仮名文字遣』慶長板本にあり、「い」部に、

ついで「つゐて／とも」次

と示される。この小書きの「ゐ」について、『蜷縮涼鼓集』では「一云」として「つゐる」を示すものの、「キ」の「イ」であると考える旨を記す。思慮深い扱いをしながらも、歴史主義の観点から言えば正しい表記に考えが至る様子が窺える。

一方、『仮名文字遣』では一つの仮名のみ示すのに、『蜷縮涼鼓集』で複数の仮名を認めているのが「あぢさい」で、慶長板本では、「ひ」部に、

あぢさい 紫陽草

とあって「ひ」のみであるが、『蜷縮涼鼓集』では既に示したように、「あぢさい」を掲げながらも小書きで「あぢさい共」と記す。『類字仮名遣』は『仮名文字遣』と同じ「あぢさい」であるが、『初心仮名遣』や『倭字古今通例全書』（元禄九年刊）では「あぢさい」としている。このように、当時両方の考えがあったか。『仮名文字遣』とは異なる「い」のほうを見出しとして掲げた理由は不明であるが。

右の幾つかの語からは、『蜷縮涼鼓集』が『仮名文字遣』とやや異なる考えをしようとする面が窺えるが、更に全く異なる仮名遣いを掲げる語もある。「さいたづま」と「はいずみ」である。『仮名文字遣』慶長板本では、「ひ」部に、

はいずみ 掃墨 (二三ウ)

とあり、「ゐ」部に、

さゐたづま 若草〔万葉／在之〕 (三六オ)

とある。『蜷縮涼鼓集』では既に示したとおりこれらとは異なり、「い」を主張している。

「さいたづま」のほうは、『仮名文字遣』は注記に典拠として『万葉集』を記すが、この語は『万葉集』には見られない語である<sup>1)</sup>。しかし『類字仮名遣』も『仮名文字遣』を踏襲して「さゐたづま 若草〔万葉二在之／二人丸秘〕」と記す。『蜷縮涼鼓集』の注記「万」もこれらを踏襲したものと見られる。仮名遣いは独自のものを示すものの、出典注記は踏襲している。なお、これ以外の注記がないので、「い」を主張する根拠は不明である。「さいづえ」「さいづち」などが「い」であることと関係があるか。サイズエ、サイズチは「和名抄」に見られる語で、歴史的仮名遣いは「さひづゑ」「さいづち」である。「さいづち」は合っているが、サイズエのほうは四つ仮名部分のみ合っているとということになる。

「はいずみ」は、歴史的仮名遣いの立場からは、『蜷縮涼鼓集』が注記で「キ」の「イ」であると記しているのが正しく、『仮名文字遣』の「ひ」は誤りということになるが、易林本節用集に「ハヒスミ」の仮名があること等からも、「ひ」と書くことが広く行われていた可能性が窺われる。これを「き」と「い」と(当時の用語で言えば)「通ふ」ことから「い」であることを明記しているわけである。当時の仮名遣

書には「き・く・い」に通うという考え方が見られるが、『蜺縮涼鼓集』も同様の考え方により、イ音便の表記をいわゆる正しいものに改めている（イ音便ではない「さひづゑ」のほうは誤っているが）。

なお形容詞語尾に関して、助動詞であるが形容詞型活用のマジが掲げられ、

まじ〔き〕／い／く／う 間敷〔不可也〕／是しき／いく／う也  
（下六ウ）

と示していることから分かるように、やはり当時の仮名遣書に見られる「き・く・い・し・う」に「通ふ」という考え方と同様の主張がなされている。

## 六

和語の語中語尾の「う・ふ」の語を挙げると、

いもじうとめ 姨〔妻之姉妹〕（上一三ウ）

かうづけの国 上野〔古作上毛野〕／かんづけ共（上一二四ウ）

かうじ 麴〔酒媒也〕／俗用二糶字二（上一二五ウ）

かうじかは 麴皮（上一二五ウ）

からうじて〔クノウ也〕 辛 辛勞 一苦（上一二六ウ）

なでう〔なんでう共〕 何條〔伊勢物語二／一無レ事〕（上一三二オ）

二オ）

うるふづき 閏月〔二云从レ王〕（下二二ウ）

くらうづ 藏人〔本官名〕／クランド／クラフド〕／今呼名二用〕  
（下四オ）

まんじゆたうげ 万寿峠（下六オ）

まうづる 詣〔物一也 参ル也〕／まうで、共（下六ウ）

こじうと 子舅〔舅之子〕（下九オ）

あづかりまうす 関白取（下一二オ）

あるじまうけ 饗 一応（下一二ウ）

したうづ 襪〔一子 下履ノ義〕／此うハクノウ也（下一〇ウ）

となる。

『仮名文字遣』慶長板本には、「しうとめ 姑」〔う部〕、「からうして 辛苦」〔う部〕、「うるふ月 閏月」〔ふ部〕、「しうと 舅 阿翁」〔う部〕、「まうす 言 申 啓」〔う部〕、「まうく 設 儲」〔う部〕、「したうづ 襪子」〔う部〕があり、これら記載のある語については、一致する。

また、右には除いておいたのであるが、共通部分の「夕」及び「木綿」を含む「ゆふ」表記のものとして、

ゆふづ、長庚〔由不豆々〕〔太白星ノ一名〕／一云ゆふづき（下一六オ）

一六オ）

ゆふづくひ 夕附日〔暮かゝる日也〕／夕月日也（同）

ゆふづくよ 夕月夜〔夕附夜同〕（同）

ゆふかづら 木綿葛（下一六オ）

ゆふづけどり 木綿付鳥〔神ニ奉ルノ雞也〕（同）

があり、このうち「夕」のほうは、『仮名文字遣』慶長板本に、「ゆふつ、長庚 太白星」(ふ部)、「ゆふつくよ 夕月夜 夕附夜」(ふ部)があり、「ふ」で一致している。

なお以下の語は、語頭相当だとすれば仮名遣いは問題にならなくなるが、一応挙げておく。

ことうじ 特牛〔俗云こてうじ／こていうじ〕 (下九オ)

こうじ 犢〔牛子也〕 (下九オ)

あめうじ 黄牛 (下二二ウ)

さめうじ 左女牛〔京〕 (下二三ウ)

めうじ 牝牛 特<sub>訓</sub> (下二六ウ)

これらの「牛」関連の語は、慶長板本では「う部」に「こうし 犢

「あめうし 黄牛」「めうし 特」があり、両書「う」で一致する。

みづうみ 湖〔水海之義〕 (下二七オ)

これも「みづうみ 湖」(う部)で一致する。これらのほか、

やそうぢ 八十氏〔無限人也〕 (下五オ)

も、うぢ 百姓<sub>ハゲヤ</sub> (下二五オ)

があった。

## 七

語頭エは次の語のみ見られ、全て「え」である。

えみじ 蝦夷〔東夷 エゾ也／エビス也〕 (下二〇オ)

えびかづら 蒲萄蔓〔紫葛<sub>ム</sub>〕 (下二〇オ)

えづく 嘔 噓〔有<sub>レ</sub>声無<sub>レ</sub>物也／えづきて共〕 (下一〇ウ)

これらのうち、『仮名文字遣』慶長板本には、「えひす」(え部)、「えひかつら 蒲萄」(え部)があり、同じく「え」である。

また語頭相当とも見られるものとして次があり、これも「え」である。

みづのえ 壬〔干ノ名〕 (下一七オ)

みづのえ 水江〔丹後／略〕 (下一七オ)

しづえ 沉枝 下枝<sub>訓</sub>〔木ノ／下枝也〕 (二九オ)

これらのうち、『仮名文字遣』慶長板本には、「ひのえひのと 丙

丁」(え部)、「みつのえの浦」(え部)、「しつえ 沈枝」(さかりの／枝也)「(え部)がある。

続いて語中語尾の「え・へ・ゑ」の例を挙げる。

まず「え」の語であるが、

かせづえ 横首杖 鹿杖<sub>訓</sub> 是<sub>訓</sub> (上二五ウ)

つらづえ 支頤〔サ、フ<sub>レ</sub>アギトヲ〕〔ほ<sub>〇</sub>ふづえ也〕 (上三〇ウ)

うづえ 卯杖 (下二ウ)

さいづえ 罇〔田器也〕 (下一四オ)

ゆんづえ 弓杖〔ゆづえ共〕 (下一六オ)

ひづえ 檜杖〔山伏〕 (下二四ウ)

このように「さいづえ」以外は、ツエ(杖)を要素とする語で、「え」となっている。『仮名文字遣』慶長板本には、「さいづえ」は「い」のところまで既に見たため省く。「うつえ 卯杖」(え部)、「かせつえ

横首杖〔え部〕、「つらつえつきて 支頤〔文集〕」〔え部〕があつて同じく「え」である。

次に「へ」の語を挙げると、

いへち 家路〔旅〕同〔上一三オ〕

いへとうじ 主人女 家童子〔上一三ウ〕

いへぐと 家土産〔略〕〔上一三ウ〕

かずへのかみ 主計頭〔助允〕〔上一二五オ〕

つゝなへ 短苗〔ミジカキナへ也／ツゝハ促也〕〔上一三〇オ〕

うぢへ 氏家〔氏〕〔下一二オ〕

さへづる 嘯〔下一四オ〕

ずはへ 嫩條也〔下一二七オ〕

となり、これらのうち、『仮名文字遣』慶長板本には、「いへ 家」〔へ部〕・「いへ 家 宅 舎 齋」〔い部〕、「いへとうし 主人女」〔毛詩〕〔へ部〕、「かずへのかみ 主計頭」〔へ部〕、「さなへ 早苗」〔へ部〕、「さへづる 嘯」〔へ部〕があり、これらはみな「へ」で一致するが、最後の「すはえ 楮」〔え部〕のみ異なる。『蜷縮涼鼓集』の「ずはへ」の「へ」に○印が付されているのは、この違いを示したものとも考えられる。『類字仮名遣』には、「すはえ 楮」〔二人／丸秘〕 気條 楚〔万／葉〕 標」とあつて、典拠「二人丸秘」から分かるとおりに、『仮名文字遣』に従っている。この語の歴史的仮名遣いは「すはえ」とさされている。『蜷縮涼鼓集』が「へ」とする理由は不明である。なお、『仮名文字遣』にないツヅナエは、『類字仮名遣』に「つゝなへ 短苗

〔略〕」とあつて、同じ「へ」である。

「ゑ」の語は、

いしづゑ 礎〔柱〕〔上一三オ〕

はずゑ 裔〔一云はつえ／初枝也〕 葉末〔上一五ウ〕

たなずゑ 手子〔上一二八ウ〕

こずゑ 梢 標〔木末之義〕〔下八ウ〕

すゑものづくり 陶 一器〔下一二七ウ〕

である。『仮名文字遣』慶長板本には、「いしすゑ 柱礎」〔ゑ部〕・「い部」・「こすゑ 梢」〔ゑ部〕、「すゑ物 陶 陶器」〔ゑ部〕があり、これらはみな一致する。『仮名文字遣』にない語については、『類字仮名遣』を見ると、「はずゑ 葉末 裔」〔師説也〕、「たなすゑのよしきらひ 手端吉葉」〔日本紀〕があつて、同じ「ゑ」となっている。

「机」は次のように「え」と「ゑ」の二つの仮名が示されている。

わきづくゑ 〔つくえ共〕 脇机〔一几〕〔上一二四ウ〕

ふづくゑ 文案〔一／几〕 書案〔ツキエ共／つくゑ共〕〔下八

オ〕

どちらにも「え」「ゑ」が示されている。『仮名文字遣』慶長板本でも、

「え」部に、

ふみつくゑ 〔ふみつくゑ／とも〕 書案 文机 机案

があり、「ゑ」部に、

ふつくゑ 〔ふみつく／え共〕 書案

があつて、同様の示され方がなされている。この語の歴史的仮名遣い

は問題とされてきた。<sup>13)</sup>

以上「え・へ・ゑ」に関しては、ズワエの「へ」「え」不一致を除くと、『蜷縮涼鼓集』と『仮名文字遣』は極めて近いと言える。

## 八

最後に和語の語中語尾の「お・ほ・を」について検討するが、「お」は第二節に挙げた語頭相当とも見られるもののみであり、既に触れたので、ここでは「ほ・を」について見ていく。

「ほ」の語には、

いらしのおほちから 貸税〔日本紀〕(上一四ウ)

はじにはひ 〔鎧二有〕(上一六オ)

ほゝづき 〔和名云ホウツキ〕 鬼燈 酸漿 〔上一七ウ〕

おほち 祖 祖父〔又老人ヲモノ云〕(上一二二ウ)

おほなむち 大汝〔略〕(上一三三オ)

おほづな 綱〔略〕(上一三三オ)

おほじか 麩〔似鹿而大也〕(上一三三ウ)

かほりじか 麿〔臍ヲ云ニ一香ト一〕(上一三五オ)

そほづ 添水〔古今ニ山田のそほづ一云そうづ僧都〕(上一二九ウ)

みづほのくに 水穂国〔日本ノ別名ノ略〕(下一七オ)

しほぢ 塩路〔下一八ウ〕

(しほぢ) 枝保持〔木名〕(下一九オ)

ひおほち 曾祖父 (下一二四オ)

ひ、おほち 高曾祖父 (下一二四オ)

がある。『仮名文字遣』慶長板本を見ると、「おほち 祖父」(ほ部・

お部)・「おほしか 麩 大鹿」(お部)・「かほる 香 匂 薫」(ほ

部)・「しほかまの浦 塩竈浦」(しほみちくれば 塩満来) (ほ部)

は同じ「ほ」で一致する。「ほうつき 酸漿 菩枕」(ほ部)は「う」

であって一致しないが、この語は、『類字仮名遣』でも「ほうづき

山茨菰〔下ノ学〕 酸漿〔二人ノ丸秘〕 菩枕〔同〕」で、「二人丸秘」

と記すように『仮名文字遣』と同じであり、『初心仮名遣』も「ほう

づき」である。このような中で『蜷縮涼鼓集』がいわゆる歴史的仮名

遣いと同じ「ほゝづき」である点は注目される。ただ残念ながらこ

にも根拠は記されていない。<sup>14)</sup>

「を」の語は以下のとおり。

くづをる 窮屈〔退屈ノ之義〕 類〔河ノ海〕(下五オ)

あをつら 藁葛 青藜 〔下一二オ〕

あをかづら 防已〔ツヅラフヂ〕(下一二オ)

みをじるし 漂信〔ミヲ木也ノ漂木同〕(下一七ウ)

みをつくし 漂標 漂申 漂漈 〔下一七ウ〕

これらも、『仮名文字遣』慶長板本に、「くづをる 窮 屈 類」(を

部)、「あをつら 青藜 藁葛」(を部)、「あをかづら 防已」(を部)、

「みをつくし 漂標〔万葉〕」(を部)とあり、このように同じく「を」

である。

以上見てきたほかに、仮名遣い問題となる語として、

くちずさひ<sup>ミ</sup> 口號〔口号同／くちずさふ共〕（下四ウ）

てずさひ<sup>ミ</sup> 手談 拵〔てずさみ共〕（下一一ウ）

がある。このうちテズサミは『仮名文字遣』慶長板本に「てずさひ手談」（ひ部）がある。このようなマ行音をハ行の仮名で書く仮名遣いについては、多くの仮名遣書に同様の記述が見られることが分かっている。また、既に語頭の「お・を」のところに挙げてある例であるが、次の「むま」を「う」で書くか「む」で書くかという点も仮名遣いの問題とさえるので、もう一度挙げておく。

おじろのむま 駿馬〔尾白〕（上二三オ）

この「馬」は『仮名文字遣』慶長板本では「む」部に「むま 馬 駒」をはじめ「むまきぬ 馬衣 馬被」などがあり、また「お」部に「むまをおさへて 推 押 抑（以下略）」「へ」部に「むまをすへて 馬居」があるなど、全て「む」となっている。この語の仮名遣いも一致している。

## 九

以上見てきたとおり、『蜷縮涼鼓集』の四つ仮名以外の仮名遣いは、『仮名文字遣』板本の仮名遣いとかなり近いものである。基本的には、定家仮名遣いによっているとよい。ただし、全く同じ、全て従うというわけではなく、異なる部分も存する。その異なる箇所に見られる『蜷縮涼鼓集』の特徴として、以下のような点が指摘できよう。

第一に、規則的に仮名が決まる部分に、乱れ、例外的ないことである。例えば、字音の「ーイ」において、『仮名文字遣』板本では「ーひ」や「ーゐ」が交じっているが、そのようなことが全くなく、全て「ーい」であるところなどに見られる特徴である。これには字音であるかどうかということに対する正確な知識があるかないかという点も関わっている。

第二に、規則的に仮名が決まる場合に、その規則を根拠として示していることである。例えば、字音「ーウ」において「ーふ」となる場合に、「入声」であることを繰り返し注記している。『仮名文字遣』のほうは何の説明もなく「ーふ」であったり「ーう」であったりする。また「はいずみ」（掃墨）や「ついでる」（序）（また両書とも「い」であったが「わいかち」（脇梶）も）のように、「キ」の「イ」であることを注記している。同様に「ク」の「ウ」である点も示す。このような箇所はこの特徴が見られると言える。

第三に、複数の仮名でなく、なるべく一つの仮名を示す方向に向かっていていることである。例えば、『仮名文字遣』板本に三つの仮名が示されるナマジイは、「なまじゐ」だけになっている。またツイヅル・ツイデの、「い」のほか「ゐ」とも、としている慶長板本に対し、「ついでる」を掲げ、しかし「ゐ」も「一云」として示しつつ、やはり「い」と考えるというところにも、やや緩いながらこの特徴が反映している。

『仮名文字遣』は、複数の人間による増補を重ねた結果、統一的で

ない様相を呈している可能性が大きいようであるが、それを無条件に取り入れるのではなく、自分の知識で解決できる部分の変更しようとしているところに、やはり著者の学識が窺われる。もともと、「さいたづま」の「万」注記や、また仮名遣いに関しても一部は、検討せず踏襲している箇所もあるようではあるが、当時としてはやむを得ないことであつたとも見られる。また右の第二の特徴があてはまらない箇所もあることは、これまでの検討において不明であるとせざるを得ないとしてきたところからも窺える。このような面も有してはいるが、右の三つの特徴のような、他の仮名遣書に比べて合理的な面があることは確かである。

これ以外にも、ハ行転呼音の「は・ひ・ふ・へ・ほ」には殆ど例外なく「ワ・イ・ウ・エ・ヲ」の注記を振り仮名として付している点は、一見くどいようではあるが、この注記のない「ちりひぢ 塵泥 塵土」などと合わせて見ると、利用者への深い配慮が窺われるものである。既に触れたように活用語尾の場合は基本的には付していないことから、何らかの周到な方針があるとも見られる。今回は、注記については仮名遣いに関わるもののみ見たので、これ以外のものも合わせると更にこの文献の特徴が見出せそうである。著者の言語に関する洞察力は、四つ仮名以外の部分にも発揮されていると考えられ、この文献は種々の面から追究する価値を有すると言える。

## 1 注

例えば、『日本語学研究事典』の「蜷縮涼鼓集」(松本宙)の項では最後に「四つ仮名以外の語の表記は定家仮名遣いによっている」と記され、永山(一九七七)の「付 家流仮名づかい説の伝統」の「十二」『蜷縮涼鼓集』には「本書は、四つ仮名については『和名抄』を参考にし、その他の仮名づかいは定家仮名づかいによっている」とある。なお、『蜷縮涼鼓集』の著者が言語に対する優れた学識を有する人物である点の指摘は、木枝(一九三三)に既に見られ、有名な亀井(一九五〇)をはじめとして多くの研究において確認されている。以下『蜷縮涼鼓集』の本文は神宮文庫蔵本の影印(大友・木村(一九七九))によった。

## 2

『仮名文字遣』慶長板本(他の板本も同じ)「ひ部」に「あひして 愛」とあることが意識された可能性もあり、『蜷縮涼鼓集』と同じ元禄期に刊行された『初心仮名遣』でも「愛」の字の語が「あひ」であること等を久保田(二〇一六)に述べた。ここに挙げた『蜷縮涼鼓集』のこの「愛着」の注記に「音アイ」と記されている点も注目される。字音語であることを強調した注記であると見られる。一方『初心仮名遣』では、「愛」が字音(こゑ)であるという意識がなかったとも考えられる。

## 3

大友・木村(一九七九)の解題、特にその補訂による。ただし、今回の調査対象の範囲では、誤り等の指摘に直接「主爨抄」という語を記しているのは、この箇所だけである。ここで「わ」を否定して「は」を主張する根拠は明らかではない。

## 5

『仮名文字遣』は、当時流通していたものという点から板本を取り上げるが、その最初のもので、他の板本もこの書を継承したとされる慶長板本(大友・木村(一九八〇)による)を用いることにする。他の板本も幾つか見たが該当の語に違いは見られなかった。

## 6

同じく『二人丸秘抄』に従うとしている『初心仮名遣』と比べても、かなり『仮名文字遣』慶長板本に近い点を久保田(二〇一六)に示した。この『二人丸秘』が『仮名文字遣』であることは夙に指摘されている。

## 7

『蜷縮涼鼓集』にも、第一節に引用したように「親行ノ抄始也今ソレヲ二人丸秘抄ト号スルハ誤ナルヘシ」という記述があり、さすがにこの著者は当時からこの誤りに気付いていたことが分かる。しかし現在でも、例えば『日本古典文学大辞典』『類字仮名遣』の項で、典拠の書として、『万葉集』などとともに、『人丸秘抄』を代表的なものとして挙げる（『仮名文字遣』は挙げない）というような誤解が見られる。『人丸秘抄』はわずかな分量しかないのであり、この「陰陽寮」はもちろん他の「二人丸秘」と注記される語も載っていない。『仮名文字遣』には、この「陰陽寮」や、「二人丸秘」と注記された他の語が記載されている。

安田（一九九四）には『初心仮名遣』の「一う」「一ふ」の不可解な点の指摘がある。

坂梨（一九七九）や同（一九九三）などに「くは」表記の例が示されている。

この『仮名文字遣』の不統一を「一步」が細かく指摘している点を久保田（二〇一一）に述べた。『初心仮名遣』には、活用語尾の仮名遣いに関しては、その「一步」を「有益な書」として引きながらも『仮名文字遣』から離れられない面があることを久保田（二〇一四）で指摘したが、それに比べると『蜷縮涼鼓集』の活用語尾の仮名遣いは、例が少ないこともあるが、乱れがないと言える。

長谷川（二〇〇二）は、歌学書からの不注意な引用によるかとする。種々の論考で紹介されている。久保田（二〇一一）でも「一步」の検討を行った。

山口（二〇〇六）は、かつて和名抄により「つくゑ」とされたが訓点資料によって「つくゑ」が通説となった「机」の歴史的仮名遣いを、「つくゑ」に戻すべきことを論じる。

『倭字古今通例全書』も他の仮名遣書と同じく「ほうづき」を掲げる（「ほをづきトモ」の注記はある）が、注記に「児女ノ類ツキニ似タル故ノ名」と記す。あるいはこのような意識が「ほ、」の仮名遣いと関

連するか。

15 酒井（一九八四・五）には、多くの仮名遣書が取り上げられ、この点に関する記述の紹介がなされており極めて有益である。『蜷縮涼鼓集』の該当項目はわずかであるが、これに加えることができるものと言える。

16 このような配慮や周到な方針は、高山（二〇一四）が「よく巧まれたつくりになっている」「たいへん使いやすさとの印象を受ける」と述べる点と関連するものであろう。

#### 参考文献

石井久雄（一九九〇）『蜷縮涼鼓集』の音韻注記（『国語学研究』三〇）

大友信一・木村晟（一九七九）『駒沢大学 国語研究 資料第一 蜷縮涼鼓集』

（汲古書院）

大友信一・木村晟（一九八〇）『駒沢大学 国語研究 資料第二 仮名文字遣』

（汲古書院）

亀井孝（一九五〇）『蜷縮涼鼓集を中心に見た四つがな』（『国語学』第四輯、『日本語のすがたどころ』（一）（吉川弘文館 所収）

木枝増一（一九三三）『仮名遣研究史』（贅精社）

久保田篤（二〇一一）『「一步」下巻の仮名遣い説について』（『成蹊国文』第四十四号）

久保田篤（二〇一三）『貞享期西鶴本の仮名遣い——『諸艶大鑑』と『好色一代女』の場合——』（近代語学会編『近代語研究 第十七集』武蔵野書院）

久保田篤（二〇一四）『初心仮名遣』の示す仮名遣いについて——活用語尾を中心に——』（『成蹊国文』第四十七号）

久保田篤（二〇一六）『初心仮名遣』における和語の「い・ひ・ゐ」について』（『成蹊国文』第四十九号）

酒井憲二（一九八四・五）『中近世における一種の仮名遣いについて』（『語文』（日

本大学）第六十・六十一・六十二輯、『甲陽軍鑑大成第四巻研究篇』（勉

誠出版) 所収)

坂梨隆三(一九七九)「曾根崎・心中の「は」と「わ」——その仮名遣と仮名の字体について——」(『茨城大学文学部紀要(人文学科論集)』第一二号、『近世の語彙表記』(武蔵野書院) 所収)

坂梨隆三(一九九三)「堀川波鼓の表記について」(近代語学会編『近代語研究 第九集』武蔵野書院、『近世の語彙表記』(武蔵野書院) 所収)

島田勇雄(一九六六)「連歌師のかなづかい書」(『甲南大学文学会論集』第三二号、『西鶴本の基礎的研究』(明治書院) 所収)

高山知明(二〇一四)『日本語音韻史の動的諸相と蜷縮涼鼓集』(笠間書院)

永山勇(一九七七)『仮名づかい』(笠間書院)

長谷川千秋(二〇〇一)『仮名文字遣』における「万葉」の引用」(『国語文字史の研究 六』和泉書院)

安田章(一九九四)「平仮名文透視」(『国語国文』第六三卷第九号、『国語史の中世』(三省堂) 所収)

山口佳紀(二〇〇六)「ツクエ(机)の語源と歴史的仮名遣い」(『国語語彙史の研究 二十五』和泉書院、『古代日本語史論究』(風間書房) 所収)